

資料紹介 日本建築学会所蔵の伊東忠太資料について

橋 寺 知 子

Chuta Ito's Documents Owned by the Architectural Institute of Japan

Tomoko Hashitera

Chuta Ito (1867–1952) was an architect who drew up many plans for Japanese modern architecture as well as a historian who developed the system of Japanese architectural history. He is one of the most important figures in the Japanese modern architectural history. A part of the documents that Chuta Ito left were donated to the Architectural Institute of Japan (AIJ) by his bereaved family. This paper gives an outline of the documents owned by AIJ.

There are about 9000 documents in Chuta Ito archives of AIJ. It includes his diary, fieldnotes, photographs, maps rubbed copies, drawings and so forth. The central part of the archives is 74 volumes of field notes which Chuta Ito carried all his life. We can search for his thinking processes and interests at the time from descriptions in these notes. When he went abroad for his research, he wrote down many things, including the manners and customs and landscape sketches of the countries he was visiting. These documents will be very helpful in many fields not limited to architecture.

1. 序

伊東忠太（1867-1954）は、明治期から昭和戦前期にかけて建築界において活躍し、日本の近代建築の歩みに大きな影響を与えた人物である¹⁾。伊東は建築史家として日本建築史の体系を構築し、日本の将来の建築を考え、西洋の建築理論に匹敵する日本の建築理論をうち立てよ

うとした建築論の第一人者である。また、机上の理論だけでなく、自ら実際に設計し、日本にふさわしい近代建築を模索した建築家でもあった。今日では専門が細分化され、研究者はなかなかその学問体系の全体を把握しながら研究を進めるということができていないが、明治期の先達は、研究、教育、建築設計の実践、社会的活動と幅広く活躍し、いずれの面においても素晴らしい成果を残している。伊東忠太の活動は、中でも幅広い。日本の近代建築を探っていくと、あらゆる面で伊東忠太を避けて通ることはできない。伊東忠太は日本の近代建築の理論の源とも言えるのである。

その伊東忠太が、建築を学び始めた大学時代から晩年までの日記やフィールドノート、写真類、地図などの資料は、ご遺族の手によって保管されていたが、2000年に日本建築学会へ寄贈され、2003年1月に開館した建築博物館の所蔵品第1号となった。本稿は、この日本建築学会に寄贈された伊東忠太資料を紹介するものである。この資料群は点数が多く、また1人の建築学者の手稿を中心とした資料でありながら、その内容は建築分野にとどまらず、美術、風俗、そして時事問題など、広範な内容を含んでいる。そのような点から、この資料は広い分野の方々にも活用される可能性があると思われる。なお、ご遺族から日本建築学会に資料が寄託された1997年に伊東忠太未公開資料特別研究委員会が組織され、そのもとにワーキンググループを組織し、資料整理はそのメンバーを中心におこなわれた。ここに記す内容は、この成果がもとになったものである²⁾。

2. 伊東忠太資料の概要

ご遺族から日本建築学会に寄贈された伊東忠太資料は8,969点にのぼる。これらは伊東忠太の遺した資料のすべてではないが、東京帝国大学造家学科に在学中の日記に始まり、晩年の昭和20年代までの伊東忠太自身の手による個人的な記録が中心となっている³⁾。手稿以外では、様々な場所で撮影した風景や建築の写真、交友のあった人々の写真、教材資料、地図などが含まれている。表1にその概要を示す。

中心となる伊東忠太の個人的記録は、帝国大学在学中の日記“うきよの旅”と全74冊のフィールドノート、大正期より描き始めたハガキ絵（戯画）である。中でもフィールドノートは、大学卒業後の早い時期から晩年まで、つまり伊東の活動期のほとんどを記録したデータであり、伊東忠太の思考の源泉を探ることのできる貴重な資料である。

なお、この資料群には伊東の蔵書はほとんど含まれていない。蔵書の類は伊東の没後散逸してしまったようである。伊東の残した論文からは、古今東西の書物から様々な知識を得て、それを独自の理論へ練っていった様子が見られる⁴⁾。残されたフィールドノートにも、様々な書

物からの知識の収集が見られる⁵⁾。伊東忠太の蔵書がまとまった形で残っていたならば、さらに多くのことを探ることができたと思われ、残念である。

表1 日本建築学会所蔵伊東忠太資料の内容

	分類	概要
(1)	フィールドノート	全74冊，ほとんどが16×10cm程度の市販ノートを使用
(2)	はがき絵	使い古しのはがきを再利用して描いた漫画日記
(3)	忠太自画傳，怪奇図案集 甲，修学旅行記	色紙に描いた図や講義用資料の図，下図，明治23年の修学旅行の記録 他
(4)	“うきよの旅”	帝国大学在学中の日記
(5)	“法隆寺”	法隆寺に関連する雑多な種類の資料集
(6)	拓本	国内外での石碑等の拓本
(7)	巻図面	設計作品（上杉神社）の図面，法隆寺の諸建築の図面
(8)	地図，書類等	日本及び朝鮮の地図類，伊東忠太自身の履歴書，渡航時のパスポートや卒業証書等の書類
(9)	書簡	大学卒業直後から晩年までの自筆書簡および伊東忠太が受け取った書簡類
(10)	写真	国内外の調査旅行での記録写真，人物の集合写真，様々な人物のポートレート等
(11)	その他	図録，写真アルバム等

3. フィールドノートの特徴

資料の中核を担うフィールドノートは，伊東が常に携えていたもので，建築や都市の調査記録，論文・講演の草稿はもとより，日常の忘備録でもあり，また手慰みの落書き帳でもあった。いわば伊東忠太の頭の中を映し出したものと言えるだろう。全部で74冊残されており⁶⁾，その記述内容を見れば，伊東忠太の興味の在処が多岐にわたっていることがわかる。フィールドノートそれぞれの内容については，『報告書 伊東忠太その実績と資料』⁷⁾に，巻ごとの解題が掲載されているが，本章では，それらを参考にし，整理作業を通して明らかになったフィールドノートの特徴について整理しておきたい。

74冊のフィールドノートのほとんどは，巾16センチ，高さ10センチの横長のノートである。厚さは1センチ程度のものと2センチ程度のものがある。フィールドノートには番号がふられているが，これは使用された年代の順にはなっていない。これらを記入されている内容から判

断して年代順に並べてみると、表2のようになる。調査旅行に用いたフィールドノートでは、表からはスケッチを中心とした調査の記録を書いている。調査や建築実測・スケッチの間には、移動時間に書いたと思われる論文の章立て案や草稿、戯画類も含まれている。裏表紙からは、逆方向に旅行の日程表、手紙のやりとりや金銭出納などの個人的な記録の類を記録している。調査旅行や出張に際しては、フィールドノートに日程表を書き記しているが、その日程表には、月日の記入はあるものの、年の記入は見られない。これは個人の記録として、日々使う上ではあまり問題のないことであるだろうが、資料を整理するにあたっては悩ましいことであった。幸い日曜日に丸印がふられているので、それを頼りに、また別の資料から伊東の行動を探りながら、フィールドノートの年代判定をおこなった。

表2に示した資料名称は、フィールドノートの背の部分に記入された名称で、その筆跡から伊東忠太自身がつけたものと思われる。装丁もそろっており、市販のものそのままではなく、伊東自身によってなされたように見受けられる。これらのフィールドノートは木製の専用の箱に収納されていた。伊東は晩年、フィールドノートのつまった木箱を手元に置き、読み返したり、着色を施して時間を過ごしていたそうである⁹⁾。装丁や背へのタイトルの記入も、晩年になされた可能性もある。

年代順に並べてみると、最もフィールドノートを使ったページ数が多いのは1902(明治35)年であり、中谷礼仁の報告によると、その1年間の使用量は7冊約1200ページであった¹⁰⁾。また時代によって、使い方の特徴も変わっている。同じく中谷の報告によれば、明治期のフィールドノートは常に1冊のノートを調査の野帳として用い、日記と共に経時的に用いている。大正期は、日記は見られなくなり、設計の草案や論文・講演の草稿など、主題別にノートを分けて使用する使い方に変わっている。晩年には、死亡者リストや雑ばくな図表、目的のあまりはっきりしない地図類が増えるとしている。明治期の伊東は日本国内を日本建築の調査に飛び回り、さらに世界を一周する大旅行にも出かけており、野帳もそれに応じて、見聞したものを精力的に記録したものになっている。大正期の使われ方は、伊東の活動領域が広範囲にわたるようになったのと並行している。一方、晩年は社会的活動が盛期に比べて少なくなるにつれて、その内容もまた個人的なものへと回帰していったものと推察できる。

フィールドノートの中でも興味深いのは、やはり若い頃に描かれたものである。そこから伊東忠太の思考の源を探ることができる。特に、調査旅行時に用いたフィールドノートは、見たものすべてを自分の血や肉にしようとする迫力のようなものが感じられる¹¹⁾。

表2 年代順フィールドノート一覧⁸⁾

NO.	資料名称	資料年代
64	明治二十七年以降	1893(明治26)年9月-1895(明治28)年3月
74	奈良	1895(明治28)年3月頃-1895(明治29)年
43	明治三十年以降	1897(明治30)年7月-1898(明治31)年4月頃
44	明治三十一・二年	1898(明治31)年
32	神奈川, 京都, 奈良, 和歌山, 福岡, 熊本, 宮崎, 鹿児島(鐘)	1898(明治31)年12月末-1899(明治32)年4月頃
34	愛知, 広島, 鳥取, 島根, 大阪, 滋賀	1899(明治32)年7月-10月
33	福井, 石川, 富山, 新潟, 兵庫, 高知, 京都, 奈良, 滋賀	1900(明治33)年3月-8月
35	東京, 静岡, 栃木, 長野, 富山	1900(明治33)年夏-1901(明治34)年夏
28	渡清日記	1901(明治34)年7月4日-8月21日
29	紫禁城実測帳	1901(明治34)年7月4日-8月21日
62	國朝宮史一節 抄於北京宮城乾清宮 岩原大三郎	1901(明治34)年7月-8月
〈以下世界旅行中のフィールドノート〉		
23	南船北馬 天(1)	1902(明治35)年3月29日-5月22日
24	南船北馬 天(2)	1902(明治35)年5月23日-9月21日
25	南船北馬 地	1902(明治35)年9月22日-1903(明治36)年3月13日
26	南船北馬 人	1903(明治36)年3月14日-11月30日
63	明治三十六年岩原大三君旅行日課旅費帳	1903(明治36)年2月10日-1903(明治36)年6月26日
75	古銭譜	不詳
27	第四冊	1903(明治36)年12月1日-1905(明治38)年5月25日
1	第一卷・清国・自北京至張家口	1902(明治35)年4月10日-6月6日
2	第二卷・清国・自張家口經龍門至西安	1902(明治35)年6月7日-9月27日
3	第三卷・清国・陝西・四川	1902(明治35)年9月30日-12月8日
4	第四卷・清国・自重慶至貴陽	1902(明治35)年12月9日-1903(明治36)年3月27日
5	第五卷・清国・自貴陽至新街	1903(明治36)年4月7日-6月4日
6	第六卷・印度・自緬甸至孟買	1903(明治36)年6月-9月
7	第七卷・印度	1903(明治36)年9月-12月末
8	第八卷・印度	1904(明治37)年1月-3月
9	第九卷・土耳其	1904(明治37)年
10	第十卷・土耳其, 埃及	1904(明治37)年3月-8月
11	第十一卷・叙利亞, 小亜細亞	1904(明治37)年10月-12月
12	第十二卷・希, 伊, 独, 仏	1905(明治38)年2月-4月
13	第十三卷・英, 米, 日(滋賀, 奈良, 山口, 愛媛, 兵庫)	1905(明治38)年5月-1906(明治39)年4月頃
〈以上世界旅行中のフィールドノート〉		
14	第十四卷・清国満州	1905(明治38)年8月-11月
15	第十五卷・清国満州	1905(明治38)年8月-11月
37	京都, 滋賀, 奈良, 東漸して日光廟	1906(明治39)年7月-9月頃, 1907(明治40)年6月頃
45	明治三十九年より四十年	1906(明治39)年10月頃-1910(明治43)年6月頃
36	宮城, 青森, 秋田, 山形, 千葉, 栃木	1907(明治40)年5月頃-8月頃

17	第十七卷・清国(蘇州・杭州)	1907(明治40)年9月5日-10月12日
16	第十六卷・清国(南京, 江西, 浙江)	1907(明治40)年10月13日-12月11日
69	梵漢佛語, 欧亜字彙, 諸図案	1907(明治40)年12月-1908年2月頃
68	台湾(雑)	1908(明治41)年頃
73	意匠	1909(明治42)年頃
31	京都, 兵庫, 滋賀, 奈良	1909(明治42)年8月-9月頃
18	第十八卷・清国広東上	1910(明治43)年1月-3月
19	第十九卷・清国広東下	1910(明治43)年1月-3月
46	明治四十四年より大正二年の頃 人事動物等の構想	1911(明治44)年-1913(大正2)年
20	第二十卷 仏領東京上	1912(明治45)年1月8日-2月22日
21	第二十一卷 仏領東京下	1912(明治45)年1月8日-2月22日
65	大正三年(明治四十五年より)	1912(明治45)年-1913(大正2)年
47	大正五,六,七年, 俗謡の音韻, 河内の設計, 大和の古建築等	1913(大正2)-1916(大正5)年
66	明治四十三年ポケット日記	1913(大正2)年
30	京都, 奈良, 兵庫, 岡山の社寺	1913(大正2)年7月頃-1914(大正3)年12月頃
39	明治神宮設計並諸神社	1914(大正3)年4月-1920(大正9)年
38	箱崎, 宇佐, 富貴寺	1915(大正4)年頃か?
50	大正六年後 雑記	1916(大正5)年10月頃-1917(大正6)年2月頃
48	大正六年	1917(大正6)年以降数年間
49	大正六年頃より	1917(大正6)年11月頃-1918(大正7)年9月頃
51	大正六,七,八年	1918(大正7)年9月-1919(大正8)年4月
70	俚謡額 一雑論	1919(大正8)年前後
52	大正九年より十二年 三重縣其他	1920(大正9)年-1921(大正10)年初め
53	大正十年 要領多	1921(大正10)年3月-12月
71	鎌倉 漫画 漫談	1923(大正12)年-1925(大正14)年
54	大正十二・十三年 亜細亜の有り 雑俎従横	1923(大正12)年4月頃-8月頃
72	大正十二年 大震火の主トシ建築論を試む	1923(大正12)年9月頃-1924(大正13)年9月頃
40	法隆寺 大正十二年より大正十五年まで	1924(大正13)年-1927(昭和2)年頃
42	太宰府, 朝鮮その他	1924(大正13)年-1925(大正14)年
22	第二十二卷・琉球	1924(大正13)年7月-8月
56	自昭和三年至昭和七年 雑俎と要項	1928(昭和3)年-1933(昭和8)年
67	昭和五年 伊東先生スケッチ(北平) 雲岡石窟等	1930(昭和5)年
41	熱河及錦州(康德元年)	1934(昭和9)年か1935(昭和10)年
57	自昭和九年至昭和十九年 要領雑記	1934(昭和9)年-1944(昭和19)年頃
60	渡独記上 自昭和十二年十一月十四日至昭和十三年三月二十五日	1937(昭和12)年11月-1938(昭和13)年3月頃
61	渡独記下 自昭和十三年三月二十六日至昭和十三年五月二十八日	1938(昭和13)年3月-5月
58	昭和十六年 (学術的) 當用英語語彙	1941(昭和16)年-1942(昭和17)年
59	昭和二十年七月より二十二年十二月まで	1945(昭和20)年6月-1947(昭和22)年12月
55	一欠番一	

4. 結 — 伊東忠太資料の可能性

本稿では日本建築学会に寄贈された伊東忠太関係資料について、その概要と、中核をなすフィールドノートの特徴を紹介した。さいごに、この資料群の可能性について述べておきたい。

この資料については、その存在は1980年代から先行研究でしばしば触れられ、注目されていた。その価値を鑑み、広く人々の利用に供するため、将来の公開を前提として、1996年に資料は日本建築学会に寄託され、翌年から資料全体の整理が始められた。現在まで、すでに5年ほどの年月をかけて作業を行ってきたが、資料群は質、量ともに膨大であり、資料目録は、最低限必要な項目についてはできているものの、完全なものではない。その原因は、時間不足、資金不足もあるが、伊東忠太の書き留めた内容の広範さにもある。すなわち、伊東忠太の興味の範囲、活動した範囲が広く、携わっているスタッフの知識の範囲内では、内容やその価値の判断に迷うのである。

しかし、このことは公開と同時に、広く人々の目に触れることによって、逆に補われてくるかもしれない。フィールドノートに書き留められた内容は、建築のみならず、世界の人々の風俗にもかなり関心が寄せられており、詳細な人物スケッチやそれらの比較分析がなされている。また美術・芸術全般への関心が高い。例えば、梵鐘の龍頭の部分に非常に関心を寄せ、詳細に描いたページなどがある¹⁰⁾。さらに、世界旅行において伊東がたどった途上には、現在では我々が立ち入ることのできない地域も含まれている。また今は失われてしまった遺跡等も訪ねて、詳細なスケッチや記録を残している。これらは、社会風俗史や建築に限らない歴史分野の人々によって異なる視点によって新たな知見が得られるものであろう。整理して公開することによって、広く研究者の用に供せられると同時に、広い分野の研究者によってさらにこの資料の内容が吟味され、その成果が資料の解題にフィードバックされれば、資料の価値はますます価値の高いものになると思われる。日本が開国し、西洋諸国から直接・間接の影響を受けながら急速に近代化しようとした明治期に、超人的な広範な知識を吸収し、そこから独自の理論を組み立て、精力的に発表した伊東忠太への関心は尽きない。その人物の内面をかいま見ることのできる資料群はたいへん魅力的な宝石の山と言える。今後も公開へ向けてより充実した目録の作成を図っていくと共に、他分野からのご助力を期待したい。

注

- 1) 伊東忠太の履歴や業績については、前野まさる“一、用と美の迫間で 伊東忠太”，『日本の建築 明治・大正・昭和 第8巻様式の挽歌』，三省堂，昭和57年，pp.96～105，および同書巻末の崔康勲“伊東忠太年譜”に詳しい。

- 2) これらの委員会での活動・成果については、日本建築学会伊東忠太未発表資料特別研究委員会編『報告書 伊東忠太 その実績と資料』、日本建築学会、2000年3月、同委員会編『未公開資料 新発見・伊東忠太・伊東忠太資料の新解釈とその可能性』(2000年度日本建築学会大会研究協議会資料)、日本建築学会、2000年9月にまとめられている。また、日本建築学会建築博物館開館記念所蔵資料展として、“拡張するアーカイブ 伊東忠太展”が2003年1月に開催された。同展に合わせて出版された『日本建築学会建築博物館所蔵伊東忠太資料目録・解説』は上記の報告書等を改訂・増補したものである。
- 3) 清水重教“他機関所蔵の伊東忠太関係資料”(『日本建築学会建築博物館所蔵伊東忠太資料目録・解説』、日本建築学会、2003年1月、p.5)によると、伊東忠太の一次資料は、日本建築学会の他に、多数の機関に所蔵されているが、とりわけ東京大学大学院工学系研究科建築学専攻と山形県立図書館にまとまった形で所蔵されている。
- 4) 拙稿“明治期における「日本趣味」という用語について 明治期の建築界における「日本趣味」の概念I”、日本建築学会計画系論文報告集、第432号、1992年2月、pp.123~129、“明治期の伊東忠太の建築様式論における趣味概念の導入 明治期の建築界における「日本趣味」の概念III”、日本建築学会計画系論文報告集、第450号、1993年8月、pp.141~149で、伊東忠太が様々なところから知識を吸収し、自らの理論を組み立てている過程を明らかにした。
- 5) フィールドノートでは、“Reference Books”と題して、美術や建築の歴史、理論書の書名リストが見られる。また詳細にその内容を描き写しているものもある。
- 6) フィールドノートの通し番号は75番までであるが、55番が欠番となっており、日本建築学会に所蔵されているのは74冊である。
- 7) 前掲書(注2)
- 8) 年代順に配列したフィールドノート一覧は、前掲の報告書にも掲載されているが、本稿では、報告書発行後に判明した事実も含めて改訂している。
- 9) フィールドノートの多くのページは鉛筆で下書きをして、インクで文字や図が描かれている。スケッチや図面には淡く彩色がなされているページが多い。これらの仕上げは、下書きと同時期になされたものもあるが、伊東忠太自身の筆跡の変化から判断して、晩年に加筆されたと思われるページがかなり多い。
- 10) 伊東忠太未公開資料特別研究委員会では研究成果を広く公開するため1997年から1999年にかけて6回の報告会が開催された。第3回報告会(1998年11月)での中谷礼仁の報告“伊東忠太におけるフィールドノートの役割、位置づけについて”による。報告の記録は、前掲書(注2)pp.21~23所収。
- 11) 世界旅行の全行程は、村松伸“忠太の大冒険 伊東忠太とアジア大陸探険”、『東方』、154号~181号、1994年1月~1996年4月で、フィールドノートの記述内容を丁寧に追ひ、世界旅行の詳細が記述されている。また、世界旅行の始まり部分にあたる清国でのフィールドノートは、ご子息伊藤祐信氏によって1ページごとに解説が付され、『伊東忠太見聞野帳 清国』全2巻、柏書房、1990年として出版されている。
- 12) フィールドノートNO. 18に、中国で観察した梵鐘の龍頭部分のスケッチを丹念に描いている。